

スベトラーナ・アレクシエービッチ 『戦争は女の顔をしていない』論

安元隆子

Takako YASUMOTO. A study on “*The wars unwomanly face*” by Svetlana Aleksievich. *Studies in International Relations* Vol.37, No.1. October 2016. pp.35 – 44.

This is an essay on “*The wars unwomanly face*” written by Svetlana Aleksievich. The peculiarity of her works is polyphonic narration in testimonies. From her work, we can learn about women’s lives and ways of thinking as soldiers of the USSR. Her works are not only testimonies, but literature because they include her opinions. For two main examples, a Jewish couple fought fascists with “love”, and the army nurses helped many soldiers whether they were friends or foes. We can discover the thoughts of Svetlana from these selected and organized testimonies.

【はじめに】

2015年、スベトラーナ・アレクシエービッチ¹はノーベル文学賞を受賞した。「私たちの時代における苦難と勇気の記念碑といえる、多様な声からなる彼女の作品に対して」²の授与である。この「多声的な叙述」はスベトラーナ文学の大きな特色である。この方法は、アレシ・アダモービッチ³の影響を強く受けていることをスベトラーナ自身が明らかにしている⁴。そして、

普段なら目に付かない証言者たち、当事者たちが語ることを通じて歴史を知る。そう、わたしが関心を寄せているのはそれだ。それを文学にしたい。(中略) まだぬくもりの冷めぬ人間の声に、過去の生々しい再現にこそ、原初の喜びが隠されており、人間の生の癒しがたい悲劇性もむきだしになる。その混沌や情熱が、唯一無二で、理解しきれないものが、ここではまだなんの加工もされておらず、オリジナルのままある。

と語り、「小さき」人々の生の声を集め、一つの作品にしていることを明らかにしている⁵。

だが、ここで注意すべきは、スベトラーナの作品は単なる証言集ではなく「文学」であることだ。では、いかにして「文学」となりえたのだろうか。証言集にはなく、スベトラーナの作品にあるもの

とは何なのか。こうしたスベトラーナの多声的な叙述の文学メカニズムの本質を追究することが論者の現在の課題である。

上記の点について、本論ではスベトラーナ作品の中で最も早く刊行された“У ВОЙНЫ НЕ ЖЕНСКОЕ ЛИЦО” (1984) (日本では、三浦みどり訳『戦争は女の顔をしていない』として、2008年、群像社より刊行された) を取り上げ、考察を試みる⁶。

【1】『戦争は女の顔をしていない』

まず、表題にある「戦争」とは1941～1945年の第二次世界大戦中の独ソ戦であることを確認しておきたい。第一次世界大戦で敗戦したドイツと、1917年に社会主義国家として出発したソビエト社会主義共和国連邦は、ヨーロッパの中で孤立していた。その両国が互いの保全のために結んだのが、1939年の独ソ不可侵条約であった。だが、ドイツはそれを破り、突然ソビエトに侵攻する。ソ連は、1941年9月から約2年半にわたり100万人以上の死者を出しながら寒さと飢餓を耐え抜いたレニングラード攻防戦や、モスクワを死守し、この戦争の風向きをソ連側に変えたといわれる1942年のスターリングラード攻防戦などを経て、遂に1945年ベルリンを陥落させる。そこに至るまで、ドイツ軍の戦力のほとんどをソ連軍が引き受けたのであっ

た。この戦争のソ連側の死者は約2700万人と言われる⁷。多大な犠牲を払っただけに、ドイツ・ナチズムを打ち破りヨーロッパを解放したのはソ連であるという認識は、今もロシア人の心に根強い。

このソ連軍の戦いの中で特筆すべきことは、従軍した女性兵士が100万人を超える、という事実である。その中にはパルチザンや非合法の抵抗運動に参加していた女性たちも含まれる。1941年6月22日にバルバロッサ作戦⁸を発動したヒトラーは4か月でモスクワ占領を完了する目論見だったという。このモスクワへの進軍を何としても阻止すべく、スターリンは強固な防衛線を引いたが、同時に膨大な死傷者を出した。祖国防衛のために国民が総動員され、男性は前線に立ち、女性も「銃後の守り」だけでなく、パイロットや看護師、通信、狙撃手、対空防御の任務を担い、戦闘作戦に参加したのである。ヨーロッパにおけるナチスドイツの残虐な行為はファシストへの強烈な嫌悪感を生み、女性も従軍を志願するようになったという。こうした女性たちは、初め、連絡係や電信の担当、後方支援や看護師を任されたが、看護師は徐々に前線の部隊に配属されるようになり、銃撃戦の場で負傷兵を回収し、治療を施した。レニングラードとヴォルコフの前線では3万2000人を超える女性看護師が活動し、赤軍の医療担当者の半数近くを女性が占めたという。また、女性狙撃手として戦場に向かったのは約2000人、但し、生還したのは500人程度だといわれている⁹。このうち、祖国に忠誠を誓った献身的な兵士として活躍し、若くして戦死した典型的なソ連の英雄、狙撃兵ローザ・シャニーナ¹⁰など若干名を除いて、名もなき女性兵士たちが体験した戦争はこれまで取り上げられることはなかった。そこに光を与えたのがスベトラーナ・アレクシエービッチの『戦争は女の顔をしていない』である。

しかし、この書はそう簡単に刊行を認められなかった。次はこの書に対する検閲官の言葉である。

〈これは、わが軍の兵士に対する、ヨーロッパの半分を解放したわが軍に対する中傷だ。我が国のパルチザン、わが英雄的国民にたいする中傷だ。あなたの小さなものがたりなど必要ない。我々には大きな物語が要るんだ。勝

利の物語が。あなたは誰に対しても愛情がない。わが国の偉大な思想を愛しておられない。マルクスやレーニン思想を。〉(pp.34-35)

このことばが象徴するように、戦争の最中も戦争が終わった後も、ソ連において求められたのは「英雄」の物語であった¹¹。これに対し、スベトラーナは次のように述べる。

〈女たちの戦争はしられないままになっていた……／その戦争の物語を書きたい。女たちのものがたりを。〉(p.14)

このように語るスベトラーナが書き留めた、かつての女性兵士たちの証言を検討していきたい。

【2】元女性兵士が語る戦争

集められた女性兵士の証言を読んでみると、「母なる祖国が呼んでいる！」「君は前線のために何をしたか？」といったポスターの標語に突き動かされて戦争に向かった女性たちがいたことがわかる。これは前述した「英雄」を求め、民衆を鼓舞するソ連のプロパガンダに純粋に呼応した女性たちだ。そして、〈仇を打ちたい、父の死に報いたい〉(p.144)と戦地に向かい、憎しみを持って銃を撃った女性兵士もいる。これも前述したように、残虐なナチスドイツへの嫌悪感や復讐心がある場合である。その一方で、〈子供たちの未来のために〉(p.90)前線に向かった女たちもいる。彼女たちは祖国のために、ナチスドイツやファシストからヨーロッパを解放し、子どもたちの未来のために戦場に赴いたと語っている。

このように戦場に向かう様々な動機が語られているのだが、彼女らは、自分たちは〈盲目〉になっていたのかもしれないが〈汚れていなかった〉と振り返る。彼女たちの心はひたむきで純粋そのものである。ただ、ここで注意すべきは〈あたしたちは二つの部分からできている。二つの現実で生きていた。このことを分かってほしいわ……〉(p.90)という言葉である。この部分には、この『戦争は女の顔をしていない』を読み解く鍵が隠されているのではないだろうか。「二つの部分」で成り立ち、「二つの現実」を生きていた、ということが意味するところを考えなければならない。それ

は、独ソ戦を戦った女性兵士たちが「個」と「集団」、「私」と「国家」といった二つに分裂した志向性を同時に生きざるをえなかった、ということの意味するのではないか。この「二つの部分」「二つの現実」を同時に生きることは彼女たちにとって自然なことだったのだろうか。そして、このような女性たちの姿を目の当たりにしたスベトラーナ自身は、この点についてどのように考えていたのだろうか。——これは彼女の作品の本質にも関わってくるため、ここでは問題点の指摘に留め、本稿最後に再度考察することとしたい。

さて、前述したように、女性兵士たちは男性兵士と同じように戦場、それも前線でも活動したのだが、これまでの生活の中で培われてきた女性的感性はそう簡単に捨象できるものではなかったことを多くの証言が物語っている。たとえば、言葉遣い。「生まれ、誰だ？」と言うべきところを、〈止まってください。誰ですか？失礼ですが、止まってくださらないと撃ちますよ〉(p.95)と書いた同僚を思い出している。そして、表層的な意識とは別に軍服に身を包むことへの身体全体の抵抗感、行軍中にある店でみつけた〈ハイヒールを履いて喜びにあふれてその店から駆け出した〉(p.93)思い出となる。戦場では男性用の下着しか与えられなかったため、女性用のメリヤスの下着を配給された時は〈うれしくてメリヤスの下着が見えるように軍服のボタンをはずして着たくらいよ〉(p.99)と回想されるのである。戦時中に兵士と結婚した衛生兵は〈一晩かかって包帯のガーゼで花嫁衣装を縫い上げた〉(p.279)ことを誇らしげに語っている。そして、〈夜明けの小鳥の歌を聴いていられるなら、明け方まで立ち続けてもいいと思いました。〉(p.92)という言葉には、出征前を懐かしみ、平和で穏やかな生活を希求する姿が彷彿とする。

このような女性兵士たちが心配していたことの一つは、〈足を傷つけられたらどうしよう〉(p.227)というものだった。男性は足を欠損しても英雄となるが、女性の場合は将来に何の望みも持たず、それは人生の終わりを意味すると考えたからだ。そして、〈ただひとつだけ恐れていたのは死んだあと醜い姿をさらすこと。女としての恐怖だわ。砲弾で肉の破片にされたくなかったんです〉(p.234)

という。こうした女性的な感性の描写は、いわゆる戦争を描いた文学の中にはこれまで登場してこなかった部分である。生命の存続が危ぶまれるような「戦争」という場においても、「女」性的感性を捨象することなく活動をしていた兵士が数多くいたことに読者は驚くだろう。男性兵士の存在が絶対的多数の戦場に、非戦闘地域の日常生活の中で息づいていた女性的感性が、そのまま戦場に持ち込まれていたのである。

男性用の軍服を着用し、髪を切っても、彼女たちの身体の「女」性は戦場でも顕著だ。〈私たちが通った後には赤いしみが砂に残った〉(p.241)というように、生理の血液は「女」性の明らかな符牒となる。しかし、こうした身体の「女」性は、戦場においては時に生命を奪う場合もある。脚にこびりついた血痕を落とすために川に飛び込み、銃弾に倒れた女性兵がいたことが回想されているからだ。このことを回想した彼女は〈その時初めて男でありたいって思った〉(p.241)という。

こうした女性の感性と身体は、戦場とは簡単に同化できないことが示されている。戦場に馴染むには、意識的、無意識的かは別として、精神的・肉体的な「女」性を消すが必要になるのである。それは「女」性が失われ、「男」性と同化していくことを意味する。〈戦中、女のあれが全く止まってしまいました。わかりますでしょう？戦後子供を産めなくなった女の人がたくさんいました。〉(p.236)という言葉が示すように、戦場が彼女たちの身体の「女」性を奪っていく苛酷な実態が回想されている。

こうした肉体の「女」性だけでなく、生命が奪われていく、苛酷な戦争の実態も生々しく証言されている。〈白兵戦……ボキボキいう音を憶えています。白兵戦が始まるとすぐこの音です。骨が折れる、人間の骨がボキボキ折れるんです。けものようなわめき声！〉(p.106)。〈井戸に放り込まれる子供の叫び声が〉(p.295)〈人々が泣き叫ぶ声、牛、ニワトリ、何もかもが人間の言葉を叫んでいるように聞こえました。生きとし生けるものがみな、焼かれながら、泣き叫んでいる……〉(p.301)。このように、身体のすべての五感を用い、彼女たちは戦場を、死を、表現している。のこぎりでい

くつかに切り分けられた若者、銃で撃ち殺すことを楽しみ、生きたまま村人を焼き殺すナチスの兵士の前で、女性であることは男性であることよりも虐待の対象になりやすい。

しかし、女性兵士は兵士としては特別な扱いをされた。ドイツ軍はソ連の女性兵士たちを捕虜に取らず、ただちに銃殺したという。または逆に「女ではない、できそこない」と侮辱的な視線にさらされた証言があるからだ (p.163)。この点について付言すると、独ソ戦下の戦場の性についての調査をまとめた『戦場の性』¹²によれば、国防軍は一般的に女性パルチザンも女性赤軍兵士も通常の捕虜とは見なしていなかった、という。ドイツの戦争プロパガンダでは、ポリシェヴィキの指揮下にある「銃を持つ粗暴な女」のステレオタイプが喧伝され、1941年にOKW¹³は、女性兵士は尋問後にただちに銃殺するか、あるいは保安警察と親衛隊保安部に引き渡すように命じていて、軍指導部が女性戦闘員を特別な脅威とみなしていたことを指摘している。

結局、戦場において「女」性であることは否定、侮蔑され、排除されるべきものか、敵軍にとっては特別な脅威として男性以上に虐待される運命にあったのである。その結果、行方不明になった同士は〈目はくりぬかれ、胸が切り取られていました……杭につき刺して〉置かれたのである (p.163)。

このように、女性であるために男性とは異なる殺され方をした例は決してこの証言ばかりではない。ソ連赤軍の女性狙撃兵、ローザ・シャニーナの生涯を追った『狙撃兵 ローザ・シャニーナ』¹⁴には、1944年、東欧戦線において、左頬をカッコ（ドイツ軍狙撃兵）に撃たれ、戦死したソ連赤軍の女性狙撃兵の写真が掲載されている。それは、ドイツ軍兵士が彼女の身体を調べ、女性であることがわかるように、胸部を露出させた遺体の写真である。「女」であることは戦場に違和を生じさせ、排除すべきもの、または虐待の対象として扱われていたことの証左となろう。

「女」であることは戦場に似合わない。このように殺された女性兵士だけでなく、パルチザン掃討はドイツ人男性にとって現地女性に性暴力を行う口実となっていた多くの例が報告されている¹⁵。

また、ナチスが侵攻していく途上の町や村の一般女性たちが「女」であることで、凌辱された例は枚挙に暇がないからだ¹⁶。それだけでなく、この『戦争は女の顔をしていない』に登場する元女性兵士は、赤軍の兵士がドイツ人女性を暴行したことも証言している。その凌辱された裸の女性の両足間に手榴弾が仕掛けられていたこと、ドイツ人娘が一晩中、列を作る赤軍兵士に暴行され続けたことなども証言しているのである (p.353)。

戦時下、こうした男性たちの女性に対する極めて非人間的な性暴力の物語があったことは、スベトラーナがソ連赤軍の男性兵士自らの証言を導入することによってその信憑性を増している。一人のドイツ人女性を集団暴行しただけでなく、泣き出す12,3歳の少女をも殴りつけ暴行するソ連赤軍男性兵士の証言もある (pp.32-33)。彼らは同じ赤軍兵士の女性たちにはこのことを知られたくなかったとも語っている。しかし、敵国・自国を超えてこのような非人間的な性暴力は許されるべきことではない。ここには、許すことのできない戦場の「男」性を告発しようとするスベトラーナの強い意志を読み取ることができる。

それだけではない。女性兵士が同じ赤軍の男性兵士たちの性の対象となる事や、それを逃れるために上官の〈戦地妻〉になること (p.275)、そして、戦争が終われば男性兵士は家族の元に帰り、元女性兵士が一人で子供を育てたことなどが語られる。女性兵士が真の愛情を傾けたにもかかわらず、性の対象としてのみ認知され、扱われた場合も多々あったことが赤裸々に語られている。

では、兵士以外の女たちはどのように語られているのだろうか。〈パルチザンにパン一個を与えただけで銃殺〉(p.303) されてしまうような状況の中で、子どもたちが飢えてひもじいにもかかわらず、なけなしの食料を差し出し世話をしてくれた女 (p.303)、そして、平和と子どもたちの無事のためにすべてを差し出す覚悟を持った女 (p.324) など、兵士、パルチザンと村人の境界を越えて、平和のために連帯する女たちの姿が浮かび上がる。

そして、女たちの戦後についても書いている。戦争が終わってもまだ任務を遂行し、戦争が終わらない女性たちがいたことを私たちは知る。工兵

は終戦の後も地雷を撤去する職務があり、勝利の後に死に至る場合もあったという（p.263）。そして、戦いを終えた〈男たちは戦争に勝ち、英雄になり、理想の花婿になった。でも女たちに向けられる眼は全く違っていた〉（p.149）のである。なぜならば、男性兵士たちは〈履きつぶした軍靴と男物の綿入れを着ている彼女〉（p.114）しか見ていなかったから。男たちは戦争が終わった後、〈美しいもの〉〈きれいな女の人〉に憧れ、〈彼女は香水の匂いがするんだ、君は軍靴と巻き布の匂いだから〉（p.278）と語り、女性兵士の元を去り、別の女性のところに行ってしまう例が挙げられている。そして、周りの女性たちからは、〈戦地のあばずれ、戦争の雌犬め〉（p.290）と蔑まれ、侮蔑や嫌がらせを受けたという。祖国や子供たちの未来のためにファシストと戦ったという純粋な志はすべて忘れられ、否定すべき戦争の残骸として扱われた女性が多かったことを私たちは知るのである。

忘れてはならないことは、スターリンは「捕虜」の存在を許さず、捕虜体験がある者は「人民の敵」となったことである（pp.343-347）。戦場で戦い、捕虜としての苦難を味わいやっと生きながらえて祖国に戻った彼らだが、戦前の地位と名誉を奪われ、疑惑の目にさらされながら人生を送ることを強いられた。そして、捕虜の中にはドイツ人に犯され妊娠させられ、自ら命を絶った女の子もいたという証言もある（p.351）。

【3】 証言を文学と化しているもの

このように、スベトラーナ・アレクシエービッチの『戦争は女の顔をしていない』は、これまで見落とされてきた女性兵士たちの戦争の実態を証言によって再現している。しかし、苛酷な戦争だけを描いているのではないことに注意すべきである。実はこれこそ歴史を「文学」として描きたいというスベトラーナの想いと重なる部分なのではないかと思われる。そして、「証言」を「証言」に留まらず、「文学」と化している部分なのではないだろうか。

例えば、次のような証言がある。

敵同士が収容され、同じ病院の病室に横たわる。

いつしか、両者の間には友情が芽生え、相手の容態を心配するようになる。〈あの人たちは敵同士じゃないんです。ただ、怪我をした二人の人が横たわっていただけ。二人の間には何か人間的なものが芽生えていきました。こういうことがたちまち起きるのを何度も眼にしました〉（p.168）。

こうした敵味方を越えた人間愛の発露は、当然女性兵士の心に変化をもたらす。飢えた捕虜のドイツの少年兵にパンを与える自分自身にまだ人間らしい愛情が存在していたことを知って〈私は嬉しかった……憎むことができないということが嬉しかった〉（p.169）と語るのである。このような戦場の中の人間愛の発見は他にもある。

〈ドイツ人は血だらけで横になっていて、気を失いかけています。片足は完全にうち砕かれています。もう少しで死んでしまうでしょう。それが良く分かる。味方の手当を中途にしてドイツ人の服を引きちぎり、包帯をします。（中略）味方の負傷兵はまだ気を失ってなくて、私に何かわめいています……脅しつけています……私はその人をなでてやって、気を静めてやろうとしました。それから衛生班の大型四輪無蓋馬車が来た。二人とも引きずり出して……馬車に乗せました。そのドイツの負傷者も。わかります？〉（p.194）

このように、スベトラーナは苛酷な戦争の中で女性兵士の中に発現した「人間愛」を読者に知らせようとするのだ。また、戦いとは銃を手にする事とは限らない、ということも。スベトラーナが得た証言の中には、ゲットーの中で愛し合うことによってナチスドイツのファシストたちと戦った恋人たちについて述べたものがある。それは次のようだ。——ユダヤ人の焼き打ちや銃殺の真ただ中で、少年少女がキスをしている。しかし、そこにナチスドイツのパトロールがやって来て、二人を銃殺してしまう。この光景を目撃した女性は彼らの行動を理解しようとし、そして、次のような結論を出す。

〈どうせゲットーで死ぬんだから、ゲットーでの死ではなく、自分たちらしく死にたかっんでしょ。もちろん、恋です。他ならぬ恋。ほかに何があります？恋しかありません。／

ほんとうに美しかった。でも、現実は何……
 現実はずさまじいものだった……いま思うん
 です。あの子たちは戦っていた……美しく死
 にたかったんです。あれはあの子たちが選ん
 だこと。まちがいありません。》(p.249)

力に対して力で抗するのではなく、いや、力で
 抗したくてもそれを奪われていた場合、愛しあう
 ことによってファシズムと戦う意志を表明したユ
 ダヤ人の姿を心に留めたのだ。ナチスドイツのユ
 ダヤ人大量殺戮については今更述べるまでもない
 ところであるが、ユダヤ人女性との性的接触を禁
 じた「人種恥辱」禁止令があったにもかかわらず、
 ゲットーにおいて恐怖を拡大するために意図的に
 人目に着くようにレイプを行い、大量虐殺の前
 にもユダヤ人女性をレイプしたことが報告されて
 いる¹⁷。このような現実の中で、力によらないユダ
 ヤ人の抵抗の形について語った証言の重みをスベ
 トラーナは感じていたのに他ならない。

また、先にドイツ人娘をソ連の赤軍兵士が一晩
 中行列して暴行し続けた、という証言を引用した
 が、その続きを紹介したい。このドイツ人娘たち
 はこの事実を知った上官に、整列させた大隊の中
 から犯人を見つけなさい、恥ずべきことであり、
 即、銃殺する、と言われた。しかし、彼女たちは
 じっと泣いてただけで犯人たちを告発すること
 はせず、〈これ以上血が流されるのを見たくない〉
 (p.353)と語った、という。娘たちは、凌辱され
 た憎しみよりも、許すことを選んだのだ。

女性兵士が観た戦争とは、残忍、苛酷、という
 だけではない。戦争であるがゆえにそこに芽生え
 た人間愛や愛し合うことの強さ、美しさ、許すこ
 とや平和への希求が存在していたのである。

スベトラーナは証言を集める作業の中で、その
 証言の意味の大きさに戸惑い、怖気づくことがあ
 ると吐露している。しかし、〈道はただ一つ。人間
 を愛すること。愛を持って理解しようとすること〉
 と述べている (p.180)。彼女の文学のテーマの一
 つはこの「愛」なのではないかと思われるが、詳
 細については別稿に譲ることとしたい。

同時にスベトラーナが汲み上げたのは、スター
 リン体制への懐疑と反発であったことも忘れては
 ならないだろう。

〈…戦争が始まる前に軍隊の幹部を抹殺してし
 まったのは誰なの？赤軍の指揮官たちを「ド
 イツのスパイだ」、「日本のスパイだ」と中傷
 して銃殺してしまったのは、戦争が始まる前
 に赤軍の指導部をつぶしてしまったのは誰な
 の？ヒットラーの飛行機や戦車が相手なのに、
 ブジョンヌイ¹⁸の騎兵隊をあてにしたのは誰
 なの？「わが国の国境はしっかり守られている」
 と国民に請け合ったのは誰？戦争が始まっ
 てすぐから弾が足りなかったのよ……／訊
 きたい……もう訊けるわ……私の人生はどこ
 へ行っちゃったの？〉(p.347)

時代の犠牲者という立場に甘んぜず、こうした
 苛酷な状況を作り出した為政者の責任を追及して
 いる。独ソ戦を戦う上で、なぜソ連軍がこれほど
 大きな犠牲を払わねばならなかったのかといえ
 ば、その理由の一つに、スターリンの大粛清によ
 りソ連軍の上層部が壊滅的な状態になっていたこ
 とが一因である、という見方もある。が、それを前
 提としたこのような発言はソ連時代には発せられ
 ることはなかったであろう。しかし、こうしたソ
 連の硬直化した体制への批判が元女性兵士からな
 されていることをスベトラーナは見逃さない。閉
 塞した社会主義への明らかなアンチテーゼである。
 スベトラーナは、このような人々の精神の覚醒こ
 そを伝えたかったのではないだろうか。

これは後に発表された『チェルノブイリの祈り』¹⁹
 においても同様のことが言える。スベトラーナ自
 身、自らの書を〈人々の気持ちを再現したもので
 す、事故の再現ではありません〉〈一人の人間に
 よって語られるできごとはその人の運命ですが、
 大勢の人によって語られることはすでに歴史です〉
 と語るのである²⁰。そして、これまでは「われ
 われ」という言葉で考え、行動してきたが、これ
 からは「私」という「個」で考え、決断することを
 学んだベラルーシの人々の言葉を記している²¹。
 こうした、出来事から学んだ人々の覚醒、未来へ
 の志向性が証言集の核としてあるのであり、その
 核があることで、単なる証言を並べただけの証言
 集とは異なる「文学」と成りえたのだと思われる。

先に挙げた、独ソ戦の女性狙撃兵として英雄視
 されたローザ・シャニーナは残された日記の中で、

〈以前とは違い、戦争で受ける勲章や名誉などに、はしゃいだり喜んだり、覚悟を新たにしているなんていう気持ちにはもうなれない〉²²と綴っている。そして、次のように記す。

〈 私たちはなんのために戦い、なんのために敵を殺してきたのだろうか。私は田舎の小さな村に生まれ、夢を抱いて大きな街へでて、そして憧れていた兵士になった。私は祖国ソビエト・ロシアを愛し、友人たち、仲間の兵士たち、部下たちを愛し、それらすべてを信じている。これからも祖国を信じ続けたい。しかし、そのためには耳をふさぎ、めをふさぎ、考えることをやめるしかないとしたら、私はそうすべきなのだろうか。それとも、ほかになにか正しい方法があるのだろうか。誰かその答えを教えてほしい。〉²³

ローザは戦死する10日前、友人であるピョートル・モルチャノフに宛てた手紙の中で、もし、戦争の終わりまで生き残ることができたなら、戦争で親を亡くした子どもたちを育てる施設を作りたい、と書いている。〈子どもたちを育てることは、戦場で命をかけて戦い、敵を殺すことより、ずっと尊く価値あること〉のように思えたからだ。そして、〈戦争孤児については、ロシア人もドイツ人もポーランド人、リトアニア人、ユダヤ人、その他の子どもも関係ありません。私の祖国ソビエト・ロシアの共産主義は、人種や民族、信仰をも超えたものだ、私は学びましたから〉と書いた²⁴。真の共産主義の理念に立ち返り、世界平和のために貢献したいと考えるローザには、現実の戦場の様子は偽りの祖国の表象としか映らなかつた、ということになるであろう。ナチスドイツも狂気であったが、それに抗して戦ったソ連軍や共産党国防尋問委員会も同胞を殺し、異国の罪なき人々を蹂躪し、殺戮した。「戦争」の中で、狂気であったのはナチスドイツだけではなかつたのだ。秋元健治は次のように書いている²⁵。

〈ソビエト社会主義共和国連邦。この国は、敵として打ち砕いたナチス・ドイツとは国家理念は大きく異なるが、国の姿はよく似ている。どちらの国家も、最高指導者とその側近がすべてを支配し、その絶対的権力は冷酷な殺人

や暴力による恐怖に支えられていた。最高指導者と同じように、多くの人びとも恐怖心から疑心暗鬼となり、裏切りや密告、陰謀によってお互いを傷つけ、死に追いやった。第二次大戦でひとつの独裁国家ナチス・ドイツが崩壊したが、もうひとつの独裁国家ソビエト社会主義共和国連邦は残った。〉

こうしたソ連の現状への懐疑はソ連の民衆の心に少なからず芽生えていたものだったのにちがいない。しかし、兵士は日記を書くことを禁じられていたこともあり、また、「狂気」が続く中での誤解と制裁を恐れ、ローザが遺した日記は永く公開されることはなかつた。人々の真実の想いは伏せられていたのだ。その多くの想いを元女性兵士の証言の中から汲み上げようとしたのがスベトラーナ・アレクシエービッチだったといえるだろう。スベトラーナの集めた証言の中には次のような言葉がある。〈ベルリンまで行き着きました。議事堂の壁に『私こと、ソフィア・クンツェヴィチは「戦争」を殺しにここまで来た』と書いてサインしました〉(p.237)。憎いのはナチスドイツではない。人間と人間が殺し合う「戦争」だということを女性兵士は表明している。ここには、表層的な独ソ戦を超えた、人間世界を見つめるもっと俯瞰的なまなざしが存在している。

【4】 結びに代えて——二つの現実、二つの心

この『戦争は女の顔をしていない』を理解するためのキーワードはもう一つある。それは本論【2】の中で触れたように、「二つの現実」ではないかと考える。まず、本書の冒頭にある執筆日誌(2002-2004)の末尾には次のようにある。

〈わたしもながいこと信じられなかつた。我が国の勝利に二つの顔があるということ、すばらしい顔と恐ろしい顔が。見るに耐えない顔が。わたしにはわたしなりの戦争があつた……〉(p.41)

ここでは〈すばらしい顔と恐ろしい顔〉という二律背反する価値を独ソ戦の勝利から読み取っている。この二つの顔が意味することはすでに本論

の中でも触れてきた。この部分に示唆的なのだが、スベトラーナはさらに次のようにも述懐している。

〈その後もこのように一人の人間の中にある二つの真実にたびたび出くわすことになる。心の奥底に追いやられているそのひとの真実と、現代の時代の精神の染みついた、新聞の匂いのする他人の真実が。第一の真実は二つ目の圧力に耐えきれない。〉(p.128)

これはある夫婦を訪問した時のことだが、〈私たちの戦争は二つあるんだ。それは間違いない〉と夫が言う (p.133)。彼は自分のそれは〈具体的な戦争の知識〉であり、妻のは〈気持ちだ〉と語る (p.134)。ここでは「真実」という言葉が使われているが、「公」的で観念的で集団的な発想に基づく現実理解と、「私」的で情緒的、心で感受し心から発露するものとで表現する現実とが存在していることを指している。後者は前者に比べ、常に弱者の位置に追いやられがちだが、スベトラーナはこれを見つけ出そうとしている。同時に、二つの現実、真実が自己の中に併存することは苦しいことにちがいない。それを一つに統一すること、それがスベトラーナの願いなのではなかっただろうか。『戦争は女の顔をしていない』の最後の証言の末尾には次のような言葉がある。

〈ねえ、あんた、一つは憎しみのための心、もう一つは愛情のための心ってことはありえないんだよ。人間には心が一つしかない。自分の心をどうやって救うかっていつもそのことを考えていた。〉(p.378)

この言葉が象徴するように、二つに分裂する自己からの救済が作家、スベトラーナ・アレクシエービッチの究極的な使命だったということになるだろう。『戦争は女の顔をしていない』では、スベトラーナの言葉がナレーターのように、ところどころに登場していたが、先に引用した彼女の『チェルノブイリの祈り』の中では、証言を著作にまとめる著者としてのスベトラーナ自身の言葉も時代の一証言と見做され、様々な証言と同等の位置に置かれている。その中にも、〈二つの真実——個人の真実と全体の真実を両立させるのはもっともむずかしいことです。今日の人間は時代のはざまにいます〉²⁶とある。

祖国を守るため、また、共産主義の理想を信じて多くの女たちが戦場に向かったが、「戦争」は女の仕事ではなかったのであり、今もなお、精神的に肉体的に戦争から容易に解放されずにいる女たちも多い。彼女たちの戦争は続いているのである。〈私は今でも、女の顔をしていません。よく泣きます。毎日呻いています。思い出しては。〉(p.72) この言葉は二つの現実、二つの真実、二つの心に分裂することを余儀なくされ、引き裂かれた自己を生きざるを得なかったソ連の元女性兵士を象徴している。『戦争は女の顔をしていない』という本書のタイトルにもまた、この分裂とその救済を求める意味が込められていると思われる。

【謝辞】

本論は、科学研究費補助金、基盤研究(C)、JSPS 科研費JP25370416、「スベトラーナ・アレクシエービッチの文学の研究—証言が文学に変わる時—」(研究期間2016年4月～2019年3月)の成果の一部である。

【註】

- 1 1948年、ウクライナ生まれ。国籍・ベラルーシ。大学ではジャーナリズム専攻。人々の証言を元に、戦争や社会の真実を描く。ベラルーシのルカシェンコ大統領に「アレクシエーヴィチの真実など我々には不用だ。外国で著書を出版し、祖国を中傷して金をもらっているのだ」と外国に身売りをした裏切り者と非難され、ベラルーシを脱出した時期もある。
- 2 『朝日新聞』2015年10月8日。〈アカデミーのダニウス事務局長は「彼女は40年にわたり新しい文学のジャンルを築いてきた。チェルノブイリ原発事故やアフガン戦争を単なる歴史的出来事ではなく人々の内面の歴史ととらえ、何千ものインタビューをまるで音楽を作曲するように構成して、我々に人間の感情と魂の歴史を認識させた」とたたえた。〉ともある。
- 3 1927-1994。ベラルーシの作家。戦時中はパルチザン部隊にいた。ダニール・グラニンと共にいったレニングラード包囲体験者への膨大なインタビューと日記や手記から成り立つ『ドキュメント 封鎖・飢餓・人間』上・下（新時代社、1986年）のほか、「*Иди и смотри*」を映画化した映画『炎628』などがある。
- 4 "*У ВОЙНЫ НЕ ЖЕНСКОЕ ЛИЦО*"の中で〈あるとき偶然に「わたしは炎の村から来た」というA・アダモヴィチとYa・ブルリヤとV・コレスニクの共著の本をわたしは手にした。これほどのショックをうけたのはドストエフスキを読んだとき以来だった。これまでにない形があった。人間が生きている現実そのものの声が集まって作品になっている。わたしが子供の頃に聴いたこと、街で、家の中で、カフェで、トロリーバスの中で、耳にしているその声が集まって。そうだ！分かった！わたしがさがしていたものを見つけた。そういう予感があった。／アレシ・アダモヴィチはわたしの師となった……〉と書いている。（日本語訳『戦争は女の顔をしていない』三浦みどり訳、群像社、2008年、p.13より引用。）
- 5 作品としては、以下の6作品がある。
- ① "*У ВОЙНЫ НЕ ЖЕНСКОЕ ЛИЦО*"(1984)。1997年の2巻本、2004年の普及版、2007年の選集がある。—日本語訳『戦争は女の顔をしていない』（三浦みどり訳、群像社、2008年）。この日本語訳には2004年までの証言が付加されている。ペレストロイカ直後にはまだ語る事が難しかったこと、掲載しにくかったことが付加された。
- ② "*ПОСЛЕДНИЕ СВИДЕТЕЛИ*"(1985) —日本語訳『ボタン穴から見た戦争』（三浦みどり訳、群像社、2000年）。原題は『最後の生き証人』。第2次世界大戦（独ソ戦）の時代に子供であった人々の証言集。
- ③ "*ЦИНКОВЫЕ МАЛЬЧИКИ*"(1991) —日本語訳『アフガン帰還兵の証言』（三浦みどり訳、日本経済新聞社、1995年）。原題は『亜鉛の少年たち』。ソ連のアフガニスタン侵攻の際の兵士やその家族の証言集。この本は兵士たちの英雄的名誉を棄損したとして、政治裁

判にかけられた。

- ④ "*ЗАЧАРОВАННЫЕ СМЕРТЬЮ*"(1994) —日本語訳『死に魅入られた人びと—ソ連崩壊と自殺者の記録』（松本妙子訳、群像社、2005年）。ソ連崩壊時の急激な社会体制転換期における人々の自殺についての証言集。
- ⑤ "*ЧЕРНОБЫЛЬСКАЯ МОЛИТВА. ХРОНИКА БУДУЩЕГО*"(1997) —日本語訳『チェルノブイリの祈り 未来の物語』（松本妙子訳、岩波書店、1998年）。2011年、岩波現代文庫に収録。チェルノブイリ原発事故に遭遇した人々の証言集。
- ⑥ "*ВРЕМЯ СЕКОНД ХЭНД*"(2013) —日本語訳未公刊（『セカンドハンドの時代』2016年秋刊行予定）。ソ連というユートピアが崩壊してから現在までを生きるロシアの人々の証言集。「小さき人々」の声を元に、ソビエト共産主義の掲げたユートピアとは何だったのかを検証する。
- 6 本論においては、ロシア語の原文を "*СВЕТЛАНА АЛЕКСИЕВИЧ У ВОЙНЫ НЕ ЖЕНСКОЕ ЛИЦО*"(ВРЕМЯ МОСКВА 2013)を用いて確認した上で、日本語訳は三浦みどり訳の『戦争は女の顔をしていない』（群像社、2008年）を引用した。引用部分の後ろに付したページはすべてこの日本語訳版のものである。
- 7 『新版 ロシアを知る事典』（川端香男里他監修、平凡社、2004年）「大祖国戦争」の項。（p.450）
- 8 1941年6月22日に開始されたドイツのソビエト連邦奇襲攻撃作戦の名称。ヒトラーは容易にソ連軍を撃退できると信じ、300万人の兵力をソ連国境に集結させたが、冬期装備の不備もあり、作戦は頓挫した。
- 9 『女性狙撃手 ソ連最強のスナイパーたち』ユーリ・オブラズツォフ、モード・アンダーズ、(原書房、2015年) (pp.4-7, p.111)
- 10 1924年、ロシア北部のエドマ生まれ。14歳で両親の反対を押し切りアルハンゲリク州へ行き、保育士となるが、二人の兄が戦死したことを契機に狙撃手として戦う。その勇敢な戦闘ぶりから栄誉勲章を受けたが、1945年イルムスドルフ付近で戦死した。軍では日記をつけることは禁じられていたが、密かにローザが綴っていた日記の存在が判明、後に発表され、注目を集めた。（注8に同じ、pp.73-87）
- 11 実際に、国民に対し徹底抗戦を呼びかけたスターリンは、アレクサンドル・ネフスキーなどの民族的、軍事的英雄を掲げて国民を鼓舞した。（注5、6に同じ）
- 12 『戦場の性 独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』レギーナ・ミュールホイザー、(岩波書店、2015年)の「武装した女性の扱い」(p.77)の項、参照。
- 13 国防軍最高司令部Oberkommando der Wehrmachtの略。OKWは従来の仕組みを廃し、最高司令官であるアドルフ・ヒトラー自らが国防軍を直接指揮するために1938年に創設された組織のこと。
- 14 『狙撃兵 ローザ・シャニーナ ナチスと戦った女性兵士』秋元賢治、(現代書館、2015年) (p.218)

- ¹⁵ 『戦場の性 独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』レギーナ・ミュールホイザー, (岩波書店, 2015年) の「戦時の日常」(p.67) を参照。
- ¹⁶ 『戦場の性 独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』レギーナ・ミュールホイザー, (岩波書店, 2015年) の「バルチザン掃討」(p.75), 「『女性スパイ』への性暴力」(p.80) 参照。武装した敵の兵士の前で裸にされ, 情報の隠匿を暴くために身体の開口部をすべて確認した上で処刑された例などが報告されている。
- ¹⁷ 『戦場の性 独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』レギーナ・ミュールホイザー, (岩波書店, 2015年) の「最終解決」(p.82), 「ゲッターの日常」(p.83) 参照。
- ¹⁸ 帝政ロシア軍のコサック騎兵連隊に入隊し, 日露戦争, 第一次戦に参加した。1918年には革命軍騎兵隊を指揮。第二次世界大戦では司令官として対独戦に従軍し, 43年ソ連軍騎兵官司令官となる。
- ¹⁹ 註5参照。
- ²⁰ 『チェルノブイリの祈り』(松本妙子訳, 2011年, 岩波現代文庫) (pp.29-33)
- ²¹ 註20に同じ。(pp.247-258)
- ²² 「ローザ・シャニーナの日記」1944年11月2日の部分。日本語訳は註14のp.189より引用。
- ²³ 「ローザ・シャニーナの日記」1944年11月2日の部分。日本語訳は註14のp.268より引用。
- ²⁴ 註14と同じ。(p.294)
- ²⁵ 註14と同じ。(p.298)
- ²⁶ 註20と同じ。(p.32)

【主要参考文献】

- ・『ドキュメント 封鎖・飢餓・人間』上・下, アレーシ・アダモービッチ, (新時代社, 1986年)
- ・『詳解 独ソ戦全史』デビット・M・グランツ, ジョナサン・M・ハウス, (学習研究社, 2003年)
- ・『兵士は戦場で何を見たか』デイヴィット・フィンケル, (亜紀書房, 2016年)
- ・『帰還兵はなぜ自殺するのか』デイヴィット・フィンケル, (亜紀書房, 2015年)
- ・『総力戦と女性兵士』佐々木洋子, (青弓社, 2001年)
- ・『戦争と性』マグヌス・ヒルシュフェルト, (明月堂書店, 2014年)
- ・『戦場の性 独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』レギーナ・ミュールホイザー, (岩波書店, 2015年)
- ・『女性狙撃手 ソ連最強のスナイパーたち』ユーリ・オブラズツォフ, モード・アンダーズ, (原書房, 2015年)
- ・『狙撃兵 ローザ・シャニーナ ナチスと戦った女性兵士』秋元賢治, (現代書館, 2015年)